

走钢刀

原作·太宰治
漫画·由井青朗



メロスは激怒した

必ずかの邪智暴虐の王を
※じやちぼうりやく
 除かなければならぬと
 決意した

メロスには
 政治がわからぬ

メロスは村の牧人である
 笛を吹き
 羊と遊んで暮して来た

けれども邪悪に対しては、

人一倍に敏感であった

※邪智(邪知)／悪事に働く知恵。悪知恵。
 暴虐(むごい)ことをして人を苦しめること。また、そのさま。



走如人

原作・太宰治
漫画・由井青朗



シラクス市

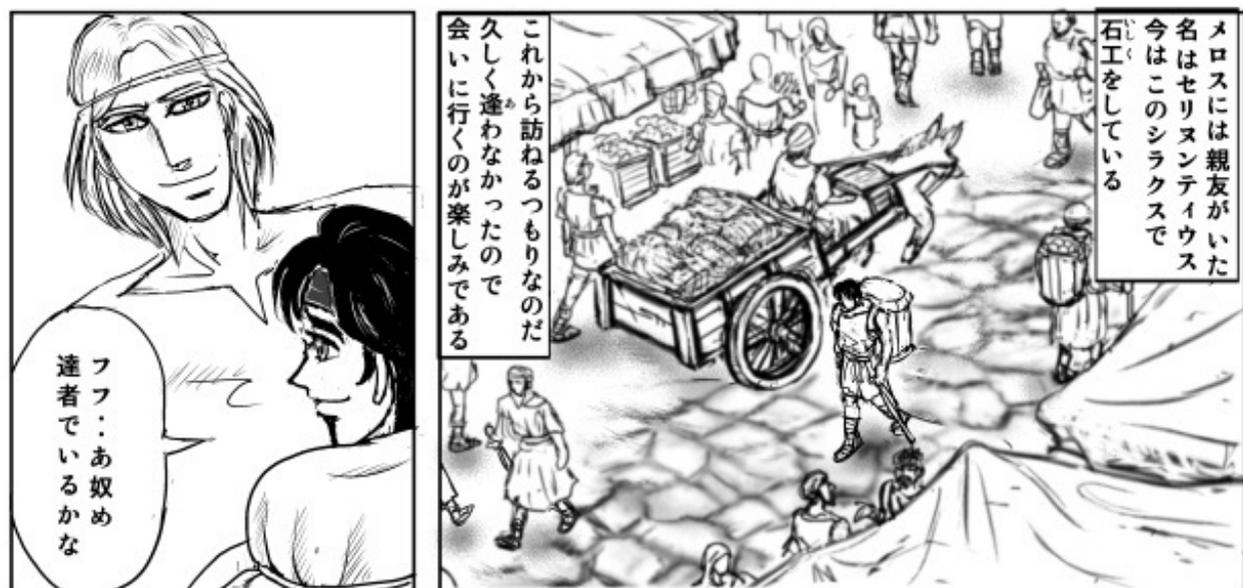


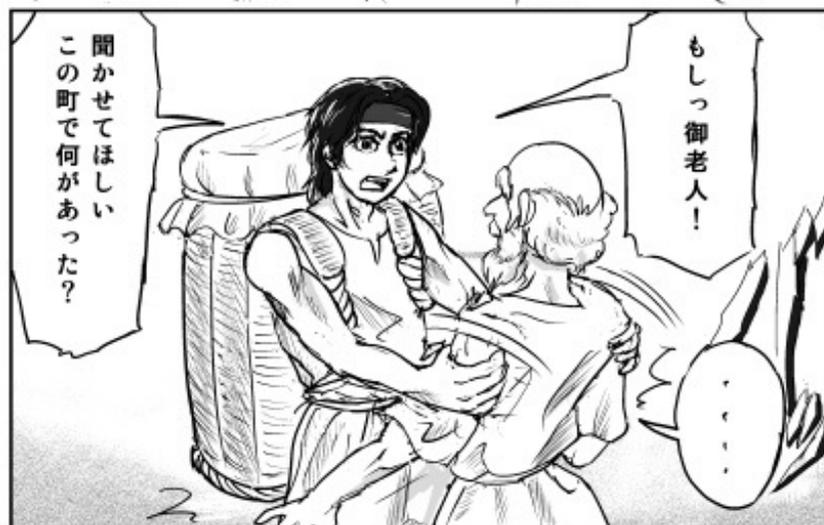
この妹は
村の、ある律気な一牧人^{まきひと}を
近々、花婿として
迎える事になっていた



きょう未明メロスは村を出発し
野を越え山越え十里はなれた
このシラクスの市にやって来た

メロスには父も母も無い
女房も無い
十六の内気な妹と
二人暮しだ









メロスは
単純な男であった

買った物を
背負ったままで
のそのそ
王城にはいつて行った



おい!
そのきさま
止まれい!

あああ

待たぬか

ええい
放るな

たちまら彼は
巡らの警吏に捕縛された

調べられて
メロスの懐中からは
短剣が出て来たので
騒ぎが大きくなってしまった



メロスは、
王の前に
引き出された。

この短刀で
何をするつもりで
あったか。言え



市を暴君の手から
救うのだ



おまえがか？

クゥッ

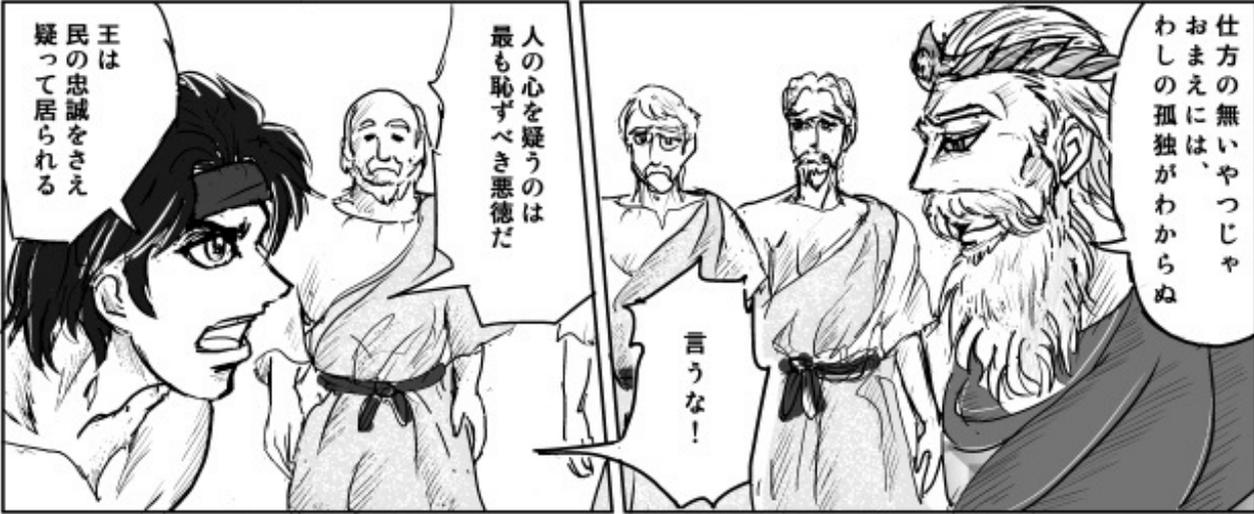


仕方の無いやつじゃ
おまえには、
わしの孤独がわからぬ

人の心を疑うのは
最も恥すべき悪徳だ

言うな！

王は
民の忠誠をさえ
疑って居られる

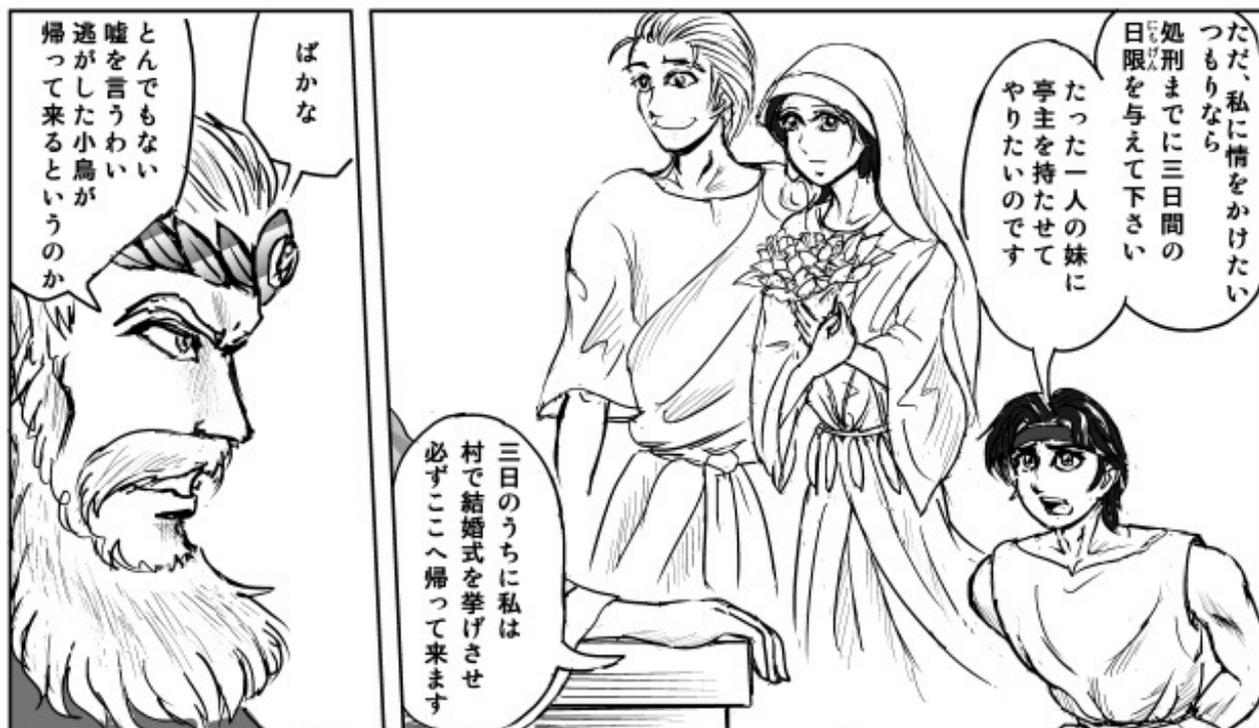


疑うのが正当の心構えなのだ
わしに教えてくれたのは
おまえたちだ

人の心は、あてにならない。
人間は、もともと
私慾のかたまりさ
信じては、ならぬ







生意気なことを言うわい
どうせ帰って来ないに
きまっている。

この嘘つきに騙された振りして
放してやるのも面白い
そうして身代りの男を三日目に
殺してやるのも気味がいい



人はこれだから信じられぬと
わしは悲しい顔して
その身代りの男を磔刑に処してやるのだ
世の中の正直者とかいう奴ばらに
うんと見せつけてやりたいものさ

願いを聞いた
その身代りを
呼ぶがよい

三日目には
日没までに帰って来い
おくれたらその身代りを
きつと殺すぞ



ちよつびり遅れて来るがいい
おまえの罪は
永遠にゆるしてやろうぞ

なっ!?!
ぬっ



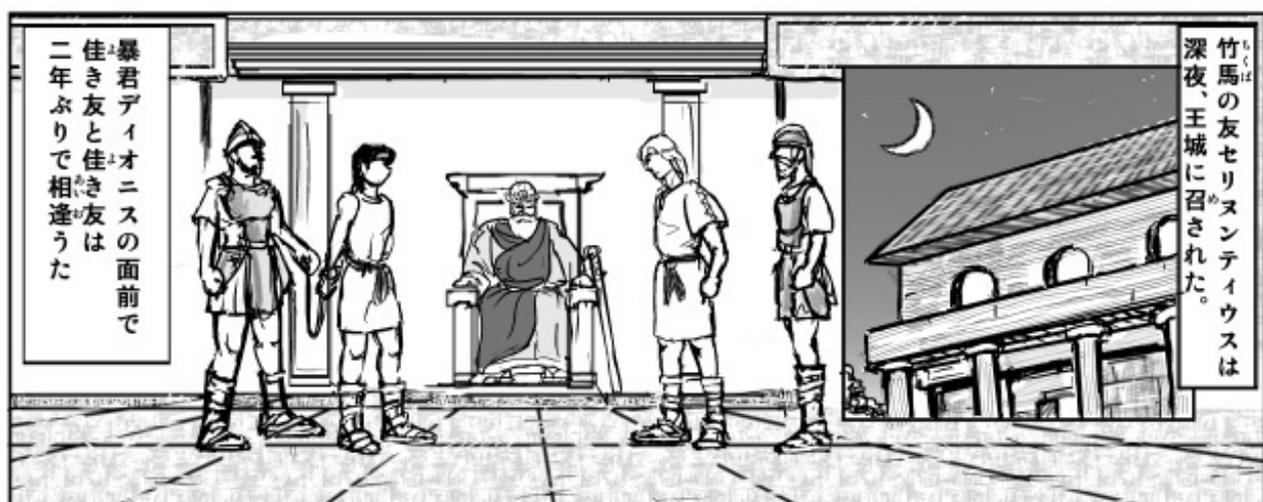
何をおっしやる

ぬははは:
命が大事だったら
おくれて来い

おまえの心は
わかってるぞ

くう:





竹馬の友セリモンテイウスは
深夜、王城に召された。

暴君ディオニスの面前で
佳き友と佳き友は
二年ぶりで相逢うた



メロスは友に
一切の事情を語った

セリモンテイウスは
無言でうなずき
メロスをひしと抱きしめた

友と友の間は
それでよかった

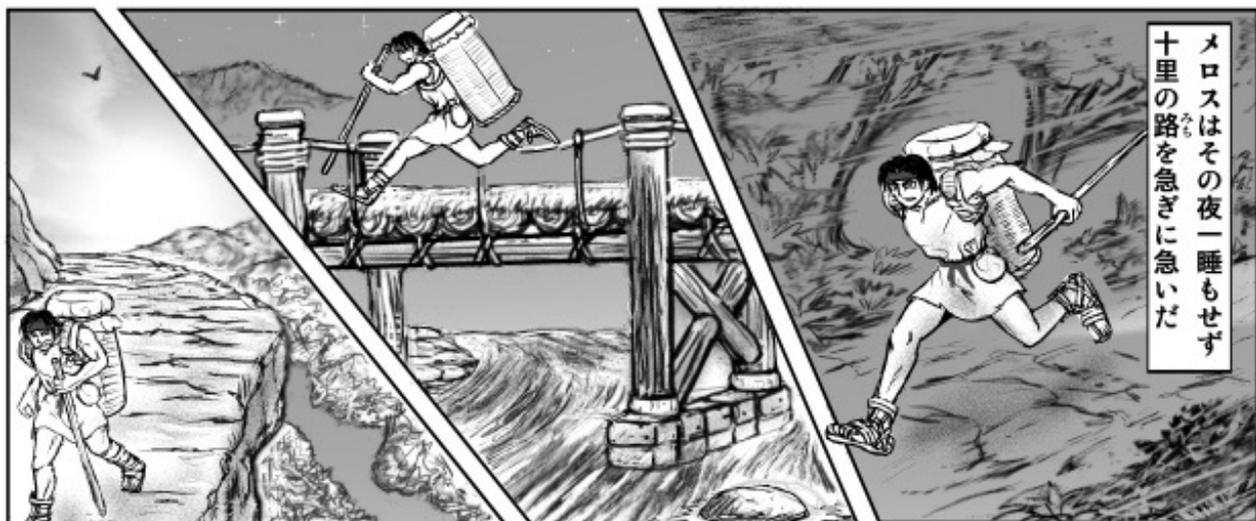


メロスはすぐに出発した

初夏、満天の星である



セリモンテイウスは
縄打たれた



メロスはその夜一睡もせず
十里の路を急ぎに急いだ



村へ到着したのは
陽も高く昇った
翌日の午前だった：



ぜーはー

まあ
どうしたの!?
こんなになって

なんでも無い：
はは：



に、兄さん!!



さあ、これから行って
村の人たちに
知らせて来い
結婚式は、あすだと



ぜー
はー

明日
おまえの結婚式を挙げる
早いほうがよからう

市に用事を残して来た
またすぐ市に
行かなければならん



メロスは、また
よろよろと歩き出し
家へ帰って
祝宴の席を調えた

間もなく床に倒れ伏し
呼吸もせぬくらい
深い眠りに落ちてしまった



少し事情がある
頼む！結婚式を
明日にしてくれ



眼が覚めたのは夜だった
メロスは起きてすぐ
花婿の家を訪れた



夜明けまで議論をつづけて
やっと、どうにか
婿をなだめすかして
説き伏せた



それはいけない！
まだ何の仕度も
出来ていない
葡萄の季節まで
待ってくれ！

待つことは出来ん！
どうか明日にしてくれ給え！



翌日：結婚式は、
真昼に行われた。





ザアアアアアア
その頃には雨も
小降りになっていよう





もうおまえには
優しい亭主があるのだから
私がいなくても
決して寂しい事は無いだろう

おめでとう：
私は疲れたから眠らせてもらおうよ
明日大切な用でまたすぐに
市に行かねばならんのだ



あ、兄さん



おまえの兄は
たぶん偉い男なのだから
おまえもその誇りを持っている



亭主との間に
どんな秘密でも
作ってはならぬ
おまえに言いたいのは
それだけだ

おまえの兄の
一ばんきらいなものは
人を疑う事とそれから
嘘をつく事だ
それは知っているね



フッ



メロスの弟になった
ことを誇ってくれ

もう一つ



私の家にも
宝とっては
妹と羊だけだ
他には何も無い
全部あげよう

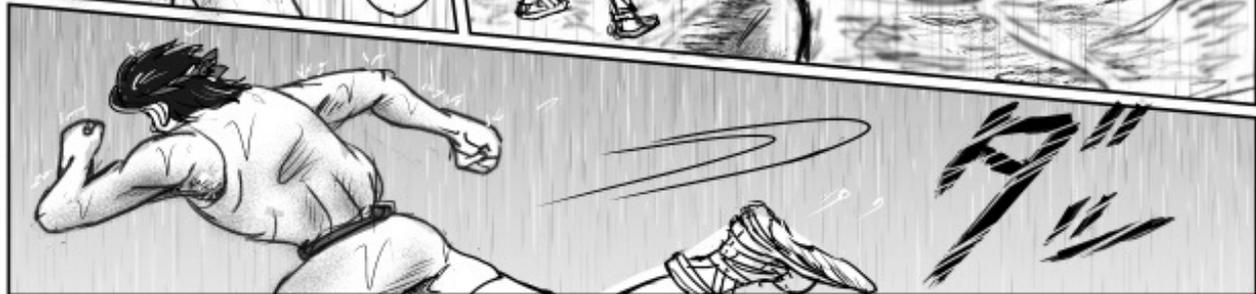
なあ婚殿：
仕度の無いのは
お互さまさ

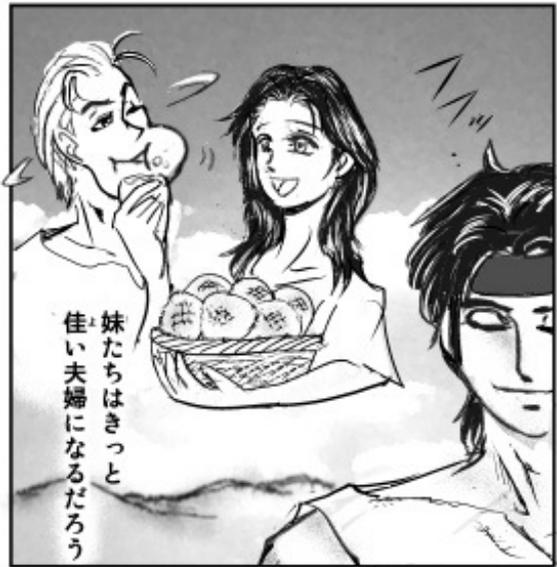


あ：ああ

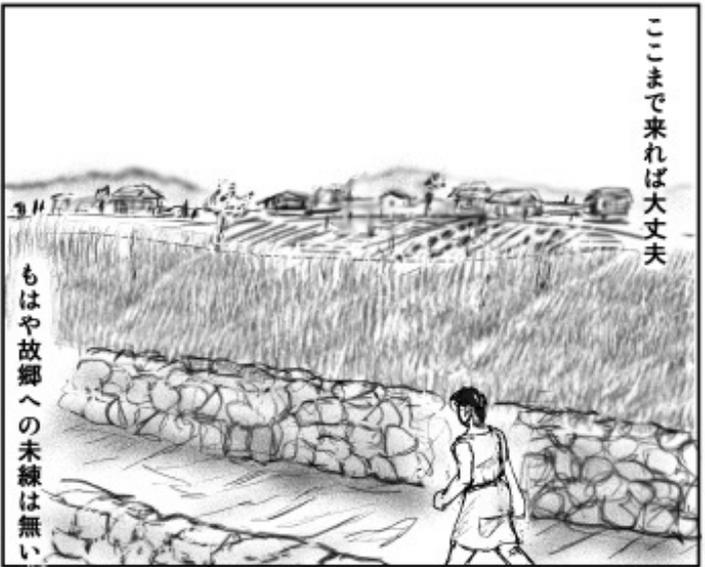








妹たちはきつと
佳い夫婦になるだろう



もはや故郷への未練は無い

ここまで来れば大丈夫



私には、いま、
なんの気がかりも
無い筈だ

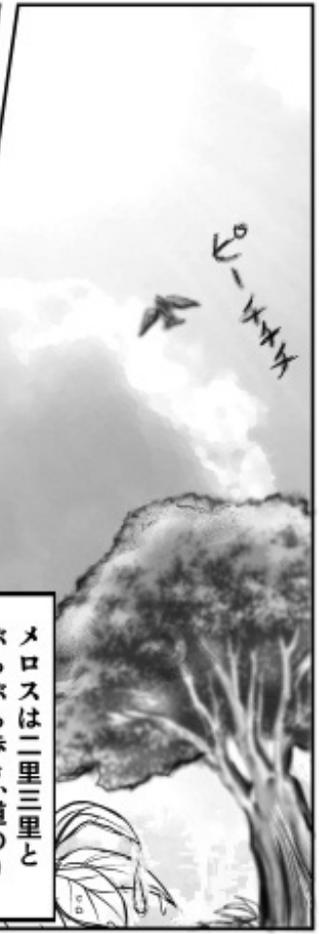
まっすぐに
王城に行き着けば
それでよいのだ

ゆっくり歩こう



メーリイさんの羊々々
羊々、ひつつっじく
ロンドン橋、渡ろう
渡ろうく、渡ろうく

ロンドン橋が落ちるっ
落ちるっ、おっちるっ
ロンドン橋が落ちるっ
マイ！フェア！レディ！



メロスは二里三里と
ふらふら歩き、道のり
半分ほどの所まで来た



イオオオ...

音が!?



※濁々／水がとどまることなく、休みなく流れるさま。





ああ神よ！
とくと
ご照覧あれ！



濁流にも負けぬ愛と
誠の偉大な力を
今こそ発揮して見せる



メロスはざんぶと
流れに飛び込み

百匹の大蛇のように
のた打ち荒れ狂う浪を相手に
必死の闘争を開始した



押し流されつつも

見事対岸の樹木の幹に
すがりつく事が
出来たのである



めくらめっぽう
獅子奮迅の姿をさらし

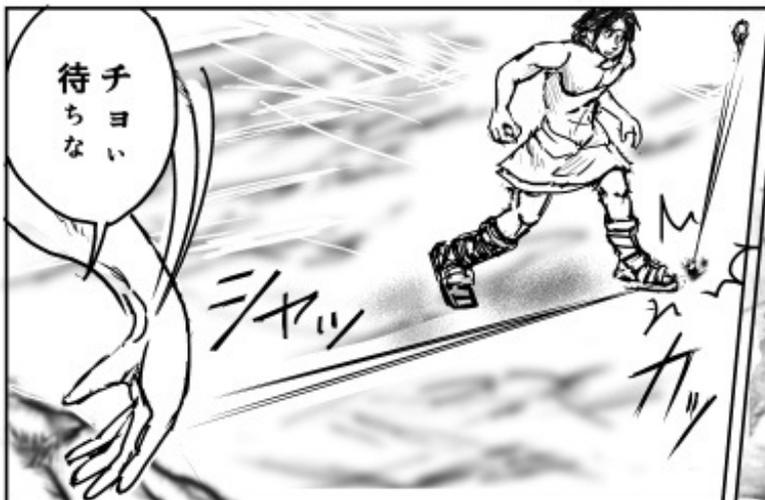
神も哀れと
思ったか、



満身の力を腕にこめて
押し寄せ渦巻き
引きずる流れを

なんのこれしきと
掻きわけ掻きわけ







まあせっかくだ
持ってる物
全部全部
置いてけって！



ツイてるねえ：あんちゃん：
俺らと出くわすなんてよオ：
だろっ？エえ〜？



私は陽の沈まぬうちに
王城へ行かなければならぬ
通せ！



その、い、の、ちが
欲しいんだって！



そのたった一つの命も
これから王にくれてやるのだ



気の毒だが
正義のためだ



さては王の命令で
ここで私を
待ち伏せして
いたのだな



やむを得ぬ：

ハア
ハア







ここまで来たが
さすがに疲労し：

折から午後の灼熱の太陽が
まともにかつと照って来て

メロスは幾度となく
めまいを感じた：

これではならぬと
気を取り直しては
よろよろ二、三歩あるいて

ついにがくりと
膝を折った

立ち上る事が出来ぬのだ

ドサ..



天を仰いで
くやし泣きに泣き出した

ああ、あ、濁流を泳ぎ切り
山賊を三人も撃ち倒し...

ぐっ

ここまで
突破して来たメロスよ
真の勇者メロスよ...



愛する友は
おまえを信じたばかりに
やがて殺されなければ
ならぬ...

今ここで
疲れ切って
動けなくなるとは
情無い



おまえは、稀代の不信の人間
まさしく王の思う壺だぞ



立ち上がろうと何度自分を叱ってみても
全身なえてもはや芋虫ほどにも
前進かなわぬ...

身体疲労すれば
精神も共にやられる...

メロスは路傍の草原に
ごろりと寝ころがった

もうどうでもいいという
勇者に不似合いなふてくされた
根性がメロスの心の隅に巣喰った

私はこれほど努力したのだ。
約束を破る心はみじんも無かった。
神も照覧私は精一ばいに努めて来たのだ
動けなくなるまで走って来たのだ
私は不信の徒では無い



ああ、できる事なら
私の胸をたち割って
真紅の心臓をお目に掛けたい
愛と信実の血液だけで動いている
この心臓を見せてやりたい
けれども私はこの大事な時に
精も根も尽きたのだ



私は、よくよく不幸な男だ。
私は、きつと笑われる。
私の一家も笑われる。
私は友を欺いた。
中途で倒れるのは、
はじめから何もしないのと同じ事だ。

ホリホリ



ああ
もう・どうでもいい
これが、私の定った運命
なのかも知れない……

セリヌンティウスよ
ゆるしてくれ
君はいつでも私を信じた
私も君を欺かなかった

私たちは本当に
佳い友と友であったのだ
いちどだって暗い疑惑の雲を
お互い胸に宿したことは無かった
いまだって君は
私を無心に待っているだろう
ああ、待っているだろう



ありがとうセリヌンティウス
よくも私を信じてくれた
それを思えばたまらない
友と友の間の信実は
この世で一ばん誇るべき宝なのだから
セリヌンティウス私は走ったのだ
君を欺くつもりはみじんも無かった
信じてくれ！
私は急ぎに急いでここまで来たのだ



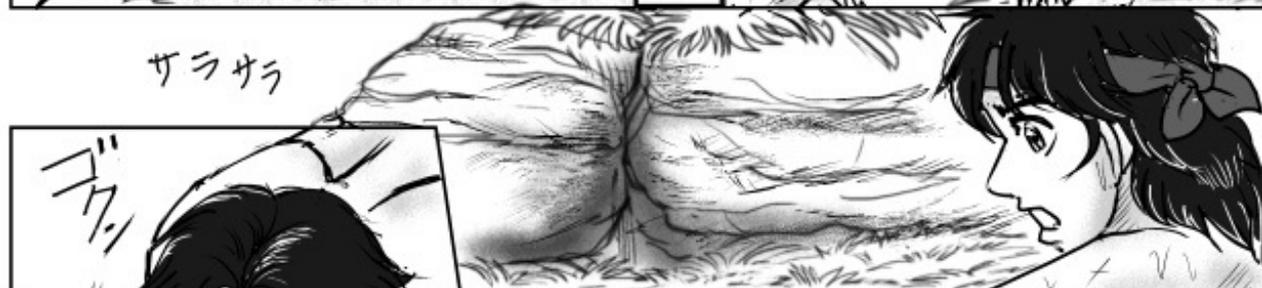
濁流を突破した
山賊の囲みからも、するりと抜けて
一気に峠を駆け降りて来たのだ
私だから、出来たのだよ
ああ：この上、私に望み給うな
放って置いてくれ
どうでもいいのだ
私は負けたのだ：だらしが無い：
笑ってくれ！



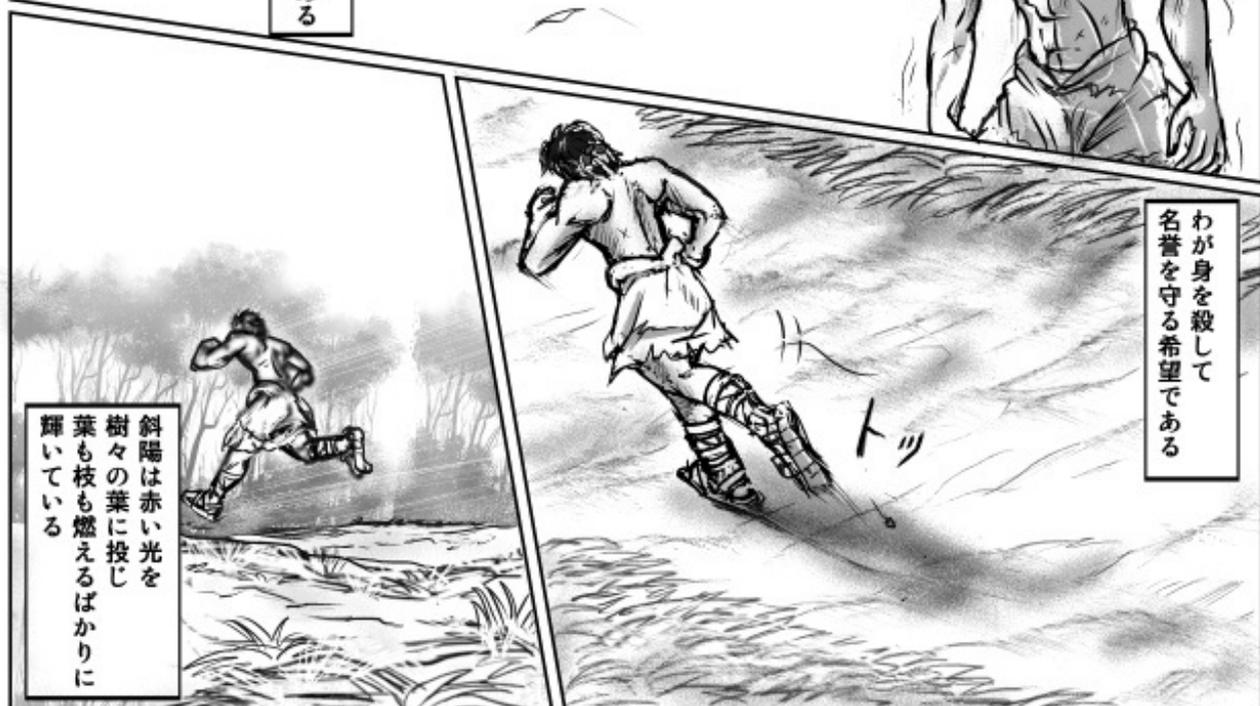


いやそれも
私のひとりよがりか?





※やんぬるかな／もうおしまいだ、今となってはどうにもしかたがない。
轟々／水がさらさらと流れるさま。







先刻のあの悪魔の囁きはあれは夢だ！悪い夢だ！忘れてしまえ！

五臓が疲れているときはふいとあんな悪い夢を見るものだメロス おまえの恥ではない



私は信頼されている

私は信頼されている



ありがたい！私は正義の士として死ぬ事が出来るぞ



やはりおまえは真の勇者だ！再び立って走れるようになったではないか！



ああ：陽が沈む：

ずんずん沈む：



うおおおおつ

私は生れた時から正直な男であった正直な男のままにして死なせて下さい



待ってくれ：神よ！

メロスは
黒い風のように
走った



跳ねとばし

路行く人を押しつけ

野原で酒宴の
その宴席の
まっただ中を
駆け抜け



酒宴の人たちを仰天させ

犬をけとばし



小川を飛び越え

少しずつ沈んでゆく太陽の
十倍も早く走った





シラクスの市の
塔楼が見える！



塔楼は夕陽を受けて
さらさら光っている！



うめくような声が
風と共に聞えた



フィロストラトスで
ございます！

貴方のお友達
セリヌンティウス様の
弟子でございます！

もう駄目でございます！
むだでございます！

走るのをやめて下さい！

ああ：
メロス様あ：

誰だ

その若い石工も
メロスの後について
走りながら叫んだ



走るのは、やめて下さい
もうあの方をお助けになる
ことは出来ません
ちょうど今あの方が
死刑になるところです



いや
まだ陽は沈まぬ



早かったなら!

ほんの少し
もうちょっとでも...



ああ...っ!
あなたは遅かった!
おうらみ申します!



メロスは胸の張り裂ける思いで
赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた
走るより他は無

やめて下さい
走るのはやめて下さい
いまはご自分の
お命が大事です

いや!
まだ陽は沈まぬ!



王様がさんざん
あの方をからかって
メロスは来ますとだけ答え
強い信念を持ちつづけている
様子でございました



あの方はあなたを
信じて居りました
刑場に引き出されても
平気でいました

それだから
走るのだ

信じられているから走るのだ

間に合う間に合わぬは
問題でないのだ

人の命も問題でないのだ

私は：なんだか：もっと
恐ろしく大きいものの為に
走っているのだ：

走

ああ：
あなたは気が狂ったか！

それではうんと走るがいい！

ひよっとしたら
間に合わぬものでもない！

走るがいい！！

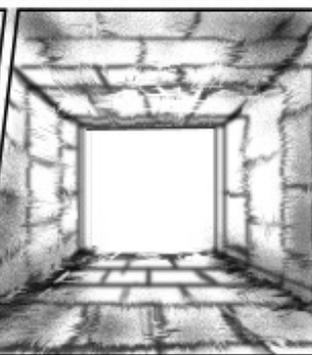
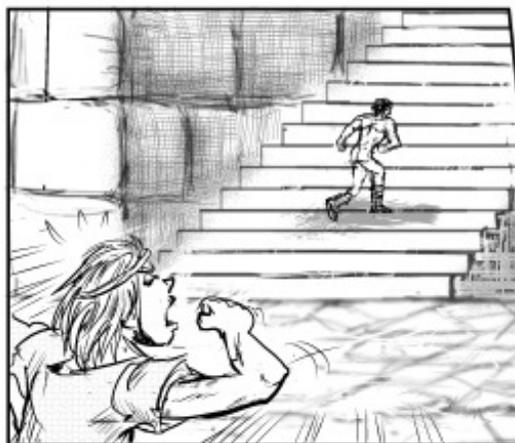
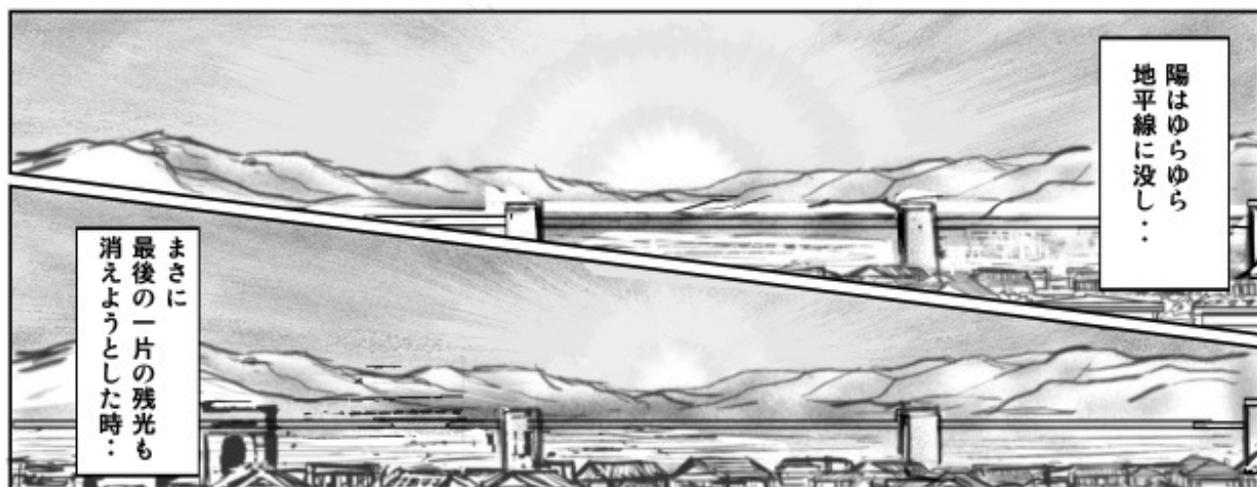
ついて来い！
フィロストラトス！

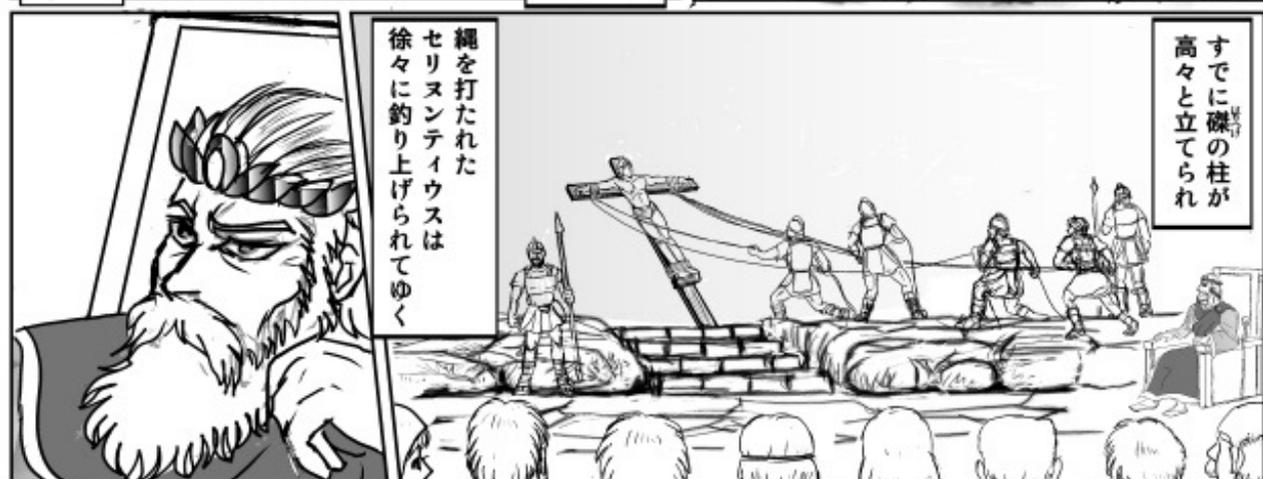
※言うにや及ぶ
まだ陽は沈まぬ
最後の死力を尽して
メロスは走った

メロスの頭はからっぽだ
何一つ考えていない

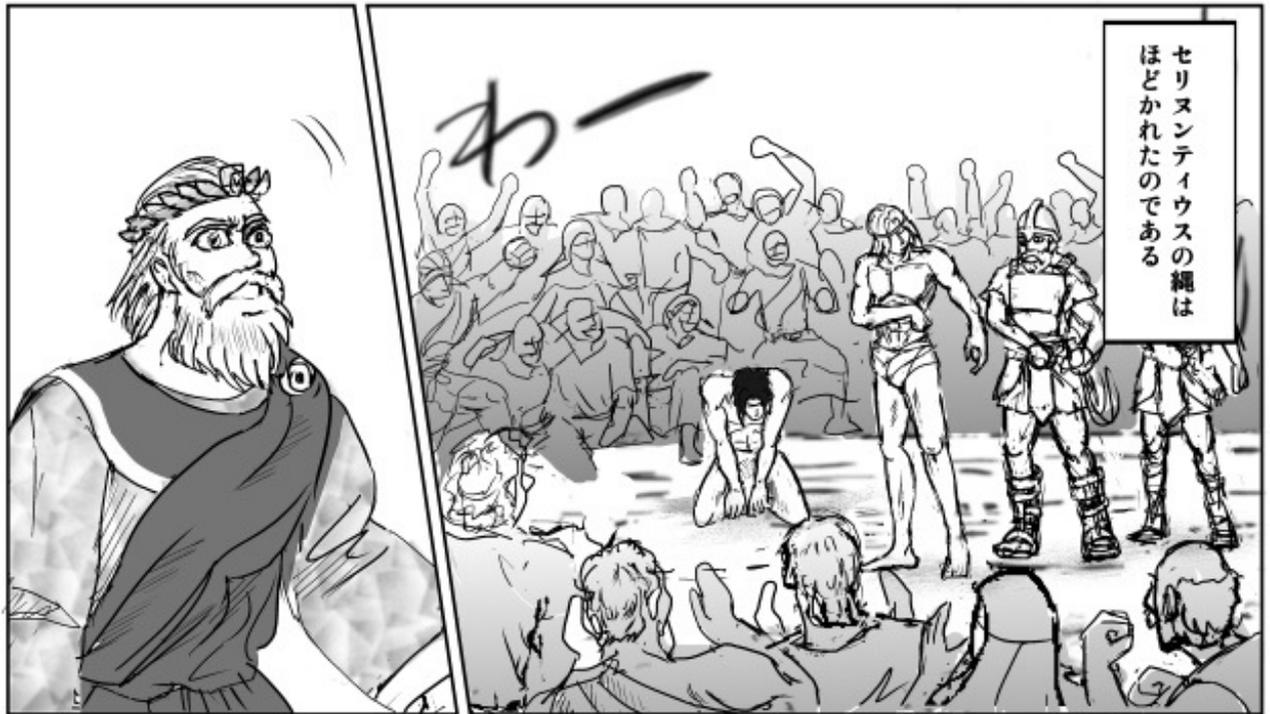
ただわけのわからぬ
大きな力に
ひきずられて走った

※言うにや及ぶ／言うに及ぼうか。言うまでもない。



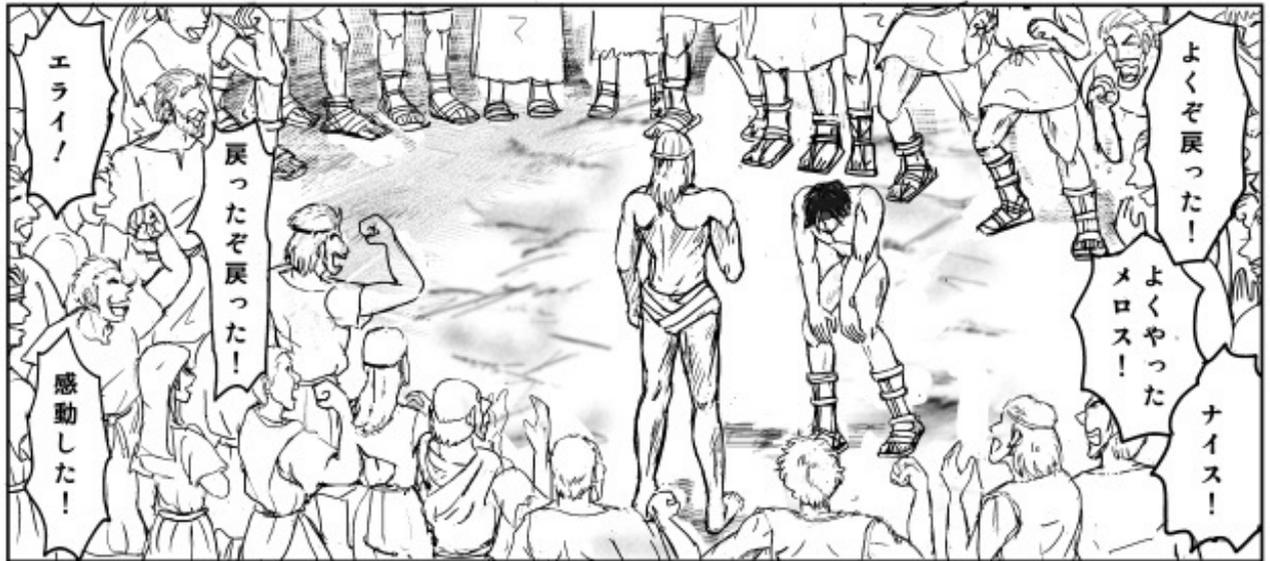






セリステンティウスの縄は
ほどかれたのである

わー



よくぞ戻った！

よくやった
メロス！

ナイス！

戻ったぞ戻った！

エライ！

感動した！



セリステンティウス：私を殴れ
ちから一ぱいに頬を殴れ

私は途中で一度悪い夢を見た
君がもし私を殴ってくれなかったら
私は君と抱擁する資格さえ無いのだ

殴れ！

セリステンティウスは
すべてを察した様子で
うなずき：



メロスの右頬を殴った

刑場一ぱいに
鳴り響くほど音高く



メロス私を殴れ

同じくらい音高く
私の頬を殴れ

私はこの三日の間
たった一度だけ
ちらと君を疑った
生れてはじめて
君を疑った

君が私を
殴ってくれなければ
私は君と抱擁できない



メロスは
腕にうなりをつけて

セリヌンティウスの
頬を殴った



ありがとう友よ



二人同時に言い
ひしと抱き合い

それから嬉し泣きに
おいおい声を放って泣いた

お〜い

オイオイ

※群衆の中からも
歓声の音が聞えた：

暴君ディオニス
群衆の背後から二人の様を
まじまじと見つめていたが

やがて
静かに二人に近づき

顔をあからめて言った



おまえらの望みは叶ったぞ
おまえらはわしの心に勝ったのだ

信実とは決して
空虚な妄想ではなかった

どうかわしをも
仲間に入れてくれまいか



どうか
わしの願いを
聞き入れて

おまえらの仲間の
一人にしてほしい



どっと群衆の間に
歓声が上がった

万歳！王様万歳！



※歓声
すすり泣くこと。



走如人

原作・太宰治
漫画・由井青朗

おわり

最後まで読んでくださり、誠にありがとうございました。

走れメロス

<http://p.booklog.jp/book/24795>

著者：由井青朗

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/seirou1515/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24795>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24795>